



## 海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑥)

高島 敬明

約1年に亘るノボロシースクにおける仕事の中で、寺島儀蔵さんとの出会いは一番心に残る出来事でした。1909年に根室の近郊で生まれた氏の人生を概観しますと—26歳の時、ロシア革命の理想を信じ樺太からソ連に入ったものの現実には理想と大きく異なった。28歳の時、スパイ容疑の冤罪で逮捕されて以降46歳の時(1955年)に釈放されるまでの18年間収容所で過ごす。釈放後、望郷の念から幾度も帰国申請をしたが、その都度却下され日本国籍も認められなかった(最終的にはソ連国籍しか認められなかった)。しかし希望を失うことなく、忘れそうになる日本語の勉強を怠らなかったのである。そして83歳(1993年)になってついに帰国が叶ったが、監視下での38年間の苦難を知るとき、第二次世界大戦前後の過酷な人生に耐えた精神力には頭が下がるばかりである(自著「長い旅の記録」から)。

さて、寺島儀蔵さんをYプロマネの部屋に案内し、Oサブマネも呼んで4人で顔合わせしました。寺島さんは次のような自己紹介をされました。

「私は戦前からロシアに住むようになり、戦後は日本人の通訳をして暮らしています。カスピ海のバクーでは東芝の電算機設置工事、レニングラードでは小松製作所のプレス据付工事、モスクワでは日立製作所の機械工場の立ち上げ、と工事現場の仕事を主にしていました。モスクワでは日本から来られる人たちの通訳もしていました」。

家族の事や住んでいる所など話されましたが、流石にどこに盗聴器があるかも分からないし政治的な話はお互いに避けました。

1953年のスターリンの死後、フルシチョフやゴルバチョフの時代が来ても人々が期待していた自由の風はそよとさえ吹きませんでした。寺島さんが話を続けられる中で、時々地名や簡単なロシア語が出てきましたが、日本から引き連れてきた3人の通訳と全く発音が違うのが我々にも分かりました。お会

いしたのは1978年ですが寺島さんは1935年からソ連で生活しているのですからネイティブに近いわけです。

お互いに打ち解けた雰囲気になりましたが、夜の帳も下りてきたのでプロマネから「寺島さん、今日はこのブリガンチーナホテルにお泊りください。明日港の現場宿舎にご案内します」の声で、今日の顔合わせは終わりました。遅くなって宿舎に帰り班長を交えてサブマネから指示された寺島通訳の部屋割りについて話し合いました。彼はこれから現場の責任者の手足となり、日夜行動を共にしなければなりません。結局私の隣部屋で同じタイプの部屋を一人用に割り当てました。

翌朝寺島さんを変え、事務所全員での打ち合わせを行いました。寺島さんを紹介しましたが、皆さん、特に3人の女性通訳は強い味方を得たとばかりにとっても喜んでいました。というのは、3人の通訳はソ連側との意思疎通がうまく図れなかったり、また男ばかりの現場なのでなかなか彼女たちの思うように動いてくれないことが多かったからです。

紹介後、Yプロマネから、「寺島さんは高島さんの現場の通訳を優先してください。事務所の通訳の仕事は必要に応じてお願いします」との指示があり、ミーティングは終了しました。そのあと寺島さんを現場に案内しました。現場まで2kmの道すがら、60代の年齢とは思えないほど飄々としてお元気で喜びにあふれていました。私を感じるには、日本人としての通訳の仕事に誇りを持っていましたし、日本人としての日本の発展を自慢しているようなところもありました。兎に角現場での心配事であった通訳の問題が解決したのには感謝するばかりでした。

それからすぐでした。配管工事、塗装工事などの作業員がどんどん入って来ました。当初の15人から50人、100人と一挙に増えたわけですから予想もできないような問題が起こって来ます。問題を解

決するには海運省に文書で申し込まなければなりませんので、寺島さんは大いに力を発揮されました。例えば以前申し込んだシャワーのお湯についての問題が発生しました。

「日本人は一日に何トンのお湯が必要か?」と再度文書で質問を受け、前と同様に一人当たり20リットルのお湯が毎日毎日必要なことをうまく寺島さんが文章を作成し提出しました。ロシア人は毎日風呂に入る習慣は無いようです。今度はボイラーを取り換えるそうで全国の海運省に手持ちのボイラーが無いか問い合わせる、との回答があったようです。計画経済なので年度初めに計画していないものはすぐには設備できないそうです。

人数が一挙に増加して、一番心配したのが皆さんの健康管理です。それまでは夜など病人が出た場合には、ブリガンチーナホテルに電話で指示を仰いでいたのですが、寺島さんが来られてからは同じ宿舎にいる彼から今までのソ連社会の体験から非常に適切な指示を頂けるようになりました。



ここで当時のソ連の医療事情について、いくつかの例をお話しましょう。

◆寮生が病気になると寺島さんが病院に同行されますが、日本から工事で来られた方だからと、順番を飛ばしてすぐに処置をしてもらいました。町では有名な工事でしたし、寺島さんの語学力によるものだと思います。病院で最初に感じたことは男性のお医者さんがいなかったことです。これはソ連の医療事情にもあるようです。4月号に書きましたがこの街には6000人の看護婦養成学校があります。看護婦を6年間経験するとドクターの資格がとれるそうです。どおりで血圧も満身に測れない医者もいました。そのためか医療は非常に遅れているとのことでした。



ノボロシースクは風が強い街で、風速40mの風が吹く。ちぎれそうな現場の「鯉のぼり」

◆日本人がある地方で歯が痛み耐えられず帰国となりましたが、モスクワで辛抱できなくなり痛み止めだけでもと歯医者にかかりました。医者は痛む歯の隣の正常な歯を抜いてしまったそうです。あごをパンパンに腫らして成田についてすぐに救急車で病院に運ばれたそうです〈寺島氏談〉。

◆ノボロシースクの病院は膝や腰の痛い非常に肥満した女性の入院でいっぱいでしたが、そこに以前尿道結石をしたことのある寮生を連れて行きました。

本人は非常な痛みで吐き気まで訴えましたが、女医の処方薬は薬を出すでもなく、「ビールをたくさん飲み、とんだり跳ねたりしなさい」とのことでした。帰国後日本の先生にその処方を聞きましたが、これは道理にかなっていると笑っていました。

◆治療が無難だったのは、少しのケガの治療です。日本の赤チンはソ連では青い色をしています。患部にそれを塗って終わりです。軟膏はまずなかったように思います。白い包帯から青い患部が見えると何か異様な感じがしました。寺島さんの勧めもあり医者には極力掛からないようにして、ただ病気にならないことを祈るばかりでした。

◆ある寮生は痔が悪化し、女性の通訳と一緒に病院に行ったそうです。通訳の言うには、「大きめの洗面器に冷たい水を入れて患部を冷やしなさい」と言ったそうです。寮生は、「もう一度医者に聞いてください。日本ではとにかく温めなさいと言われますが…」と言ったそうですが、同じ答えが返って来たそうです。国によって治療法が違うのでしょうか!

このような医療事情の下で、我々は健康に気を使い頑張ったわけです。次号は現場で発生したいくつかの事故を書く予定です。

(続く)